

日歴協シンポ参加記
 ー日本歴史学協会シンポジウム
 「史料学・史料館員問題」ー

細井 守

去る4月20日に早稲田大学文学部会議室において標記シンポジウムが開催された。感想をまじえながら報告をさせていただきたい。

このシンポジウムは、当日配布されたプログラムの「開催趣旨」に、「史料学と史料館員問題」について歴史研究内外の関係者の方々の意見を伺い、そのあるべき姿や当面している問題についての討議をはじめめる」もの、とある。

「史料学」については『岩波講座 日本通史 別巻3 史料論』における内容に象徴される如く、様々な視点から多くの発言がなされてきている。歴史学における古くて新しい重要な問題であろう。それを何故今、「史料館員」問題と絡めて議論しようというのだろうか。思惑は分からないではないが、せっかく大勢の参加があった集会在散漫になったことは否めない。

また、「史料館員」問題とは、すなわち「アーキビスト」問題であるはずだと思うのだが、このシンポでは見事に「アーキビスト＝史料館員」という歴史学会の見識と本音が前提として出されていた。アーキビストはすなわち史料学研究者ではないし、ましてや史料取扱技術者ではない。アーキビストの専門性は、それぞれの現場で如何に「権能」が付与されるかに依るものである。そこをどう実現するかの議論なしにアーキビスト（養成）問題は語られるべきではないと思う。

以下、当日の報告の概要を記す。

高埜利彦氏（学習院大学）の報告「アーキビスト養成制度の実現に向けて」は、氏が委員長を務める全史料協第二次専門職問題特別委員会の提言における「養成制度」にポイントを示し、併せて学習院大学でこの春から開講された「記録保存と現代」について言及されたものである。

次いで近藤成一氏（東京大学史料編纂所）の報告「史料編纂所と情報処理」は、情報処理の

責任者としての立場から、同所における情報処理技術の進展とデータベース構築、公開の現状報告が中心であった。「まとめ」で披瀝されるであつたらう『史料編纂学』の必要性」まで報告が及ばなかったことが悔やまれる。

水野保氏（東京都公文書館）は地方文書館における業務の現状を報告された。恐らく歴史学研究者と史料保存の現場職員とでは共通認識が得られないであろう「人事（雇用）」の問題や「現場での専門性」の問題を分かりやすく説明された。しかし、質疑での議論が「史料館員キアーキビスト」問題にあまり踏み込まれなかったため、どの程度参加者に理解されたか分らなかったのが残念である。

最後の森安彦氏（国立史料館）の報告「国立史料館『史料管理学研修会』の現状と課題」は、現在に至る国立史料館の位置付けを踏まえた上で、「史料管理学研修会」からアーキビスト養成へという展望を述べられた。

史料の情報化、業務の専門性、アーキビスト養成など、「史料学・史料館員キアーキビスト」の周辺には様々な「問題」の存在することは分かったが、何れも大きな問題である。次回からはもう少し絞って情報交換を進めていただければと思う。

散会間際に会場から「アーキビストの日本語訳を早く作れ」との指摘があった。全史料協の場でも「アーキビストの日本語訳」を議論した時期があった。あの話は何処へ行ってしまったのだろうか。

今回のシンポジウムでの「史料館員キアーキビスト」像の混乱も、本来もっと現実的に「アーキビスト」像を議論し世に提示すべき、我々全史料協側の提出しているイメージが、如何に曖昧な（非現実的な）印象しか持たれていないかを物語るものであろう。

（藤沢市文書館）